



長崎外国語大学・短期大学

チャペル通信

編集・発行
学校法人長崎学院
宗 教 部

〒851-2196
長崎市横尾3-15-1
TEL 095(840)2000
FAX 095(840)2001

VIA VERITAS VITA 「わたしは道であり、真理であり、命である」(ヨハネによる福音書14章 6 節)

寄稿

「長崎慈善会」を生んだ

初期長崎YMCA

長崎学院 理事長 松本 汎 人

一九四五年、原爆被災直後に再興された長崎YMCAが、長崎外国語短大の母体であったことは、これまでも繰り返して語られてきた。

戦前のYMCAも一九〇二(明治三五)年二月に笹森宇一郎とプロテスタント各派教会の信徒らによって創設され、宗教活動に止まらず様々な文化活動を展開し、市内唯一大集会が可能な大会館を建て、文字どおり公会堂としての役割を二十数年間にわたって担い、白アリ被害と昭和初頭の世界的大恐慌によって改築計画が頓挫し、以後十五年間休業を余儀なくされたことも明らかにしている。と

ところが長崎YMCAには、その「前史」をなす歴史的事実のあったことが最近分ってきた。

日本人による初めてのYMCAが東京に設立されたのは一八八〇(明治二三)年五月のことである。明治政府によって進められた文明開化政策によって、欧米の近代的技術や社会制度、風俗習慣などが輸入され、急速に民衆レベルにまで浸透していった。その一翼を担ったのは、禁教令の高札撤去によって大量に渡来した各派宣教師たちで、その働きでキリスト教人口は急激に増加し、全国の各都市に次々にYMCAが誕生す

ることになった。八二(明治一五)年の大阪、二年後の横浜に続いて、八九(明治二二)年までに成立したYMCAの数は二十八都市に及んだ。

わが国初のキリスト教定期刊行紙であった『七二雑報』(一八七五年神戸で発刊)を引継いで、

八四(明治一七)年十月十五日に大阪で発行された『福音新報』に次の記事が載っている。

長崎報知 一致教会にて青年会設立。



信仰を勧め、学識を研ぎ、演説会を催すの趣向なり。幹事、書記、会計等の役員を選挙す。

掲載日から逆算すると、設立日は九月下旬から十月第一週あたりと思われる、それは横浜YMCA創設の二、三週間前となる。つまり十六世紀に開港し、江戸時代を通して外国貿易の唯一の窓口として栄えた長崎には、YMCAも早期に設立されていたことになる。

長崎に初めてやってきたプロテスタント宣教師は、一八五九(安政六)年春の米国監督教会J・リギンス、

C・M・ウィリアムスで、数か月遅れて米国オランダ改革派のG・F・フルベッキがやってきた。しかし厳しい禁教策が続く中で、監督教会は三年後に居留外国人のための教会(のちの英国教会)を建てたものの日本人への宣教は叶わず、フルベッキも表向きは洋学所(のち広運館)で英語、ドイツ語教師をしながら伝道の機が熟するのを待つしかなかった。七三(明治六)年に禁教の高札が撤去されると、数か月のちには米国メソジスト監督教会のJ・C・デビソンが訪れて、東山手の丘に活水、続いて鎮西学院を設立した。明治三十年頃まで長崎の宣教は、この三派が主流であった。

七八(明治一一)年といえ、東京築地で全国基督教信徒親睦会が初めて開かれたが、その四か月前、長崎では上記三派の指導者たちが定期的な会合を始めていて、四年後に仏教徒らによって組織された「杞憂会」によるキリスト教排斥運動の際にも、共同して立ち向かったものと思われる。さらにその翌八三年春には信徒を含めた三派の会合が持たれるようになり、これがYMCA結成の基盤をなしたものと考えられる。

長崎でも九〇(明治二三)年春の演説会を最後に、公開の活動は見られなくなっていた。

翌九一年十月、愛知、岐阜県一帯をM八・四の巨大地震が襲った。そして数日間にはわたり余震が七二〇回も続いて救援を妨げた。全半壊家屋二十二万余戸、死者は七、二七三人であった。この時長崎YMCAの学生会員たちは臨時会を開いて、濃尾地震被災者への義捐方を協議した。その結果、僅か十円の備蓄金を送るよりも、その金を元手にして慈善音楽会を開くことにした。そこでYMCA単独とせず、名を捨てて広く市中の有力者に協力を求めることにした。最初消極的であった人々も、熱心な勧誘にまらず高官の夫人たちが賛成し、競って県知事はじめ有力者のほとんどが賛同にまわってくれた。

こうして実現した舞鶴座での慈善音楽会は二日間、一万人が入場して、なお場外に人が溢れるほどの大盛況であった。義捐金五二〇円は福井を含む被災三県に送られた。そして二年後、音楽会を成功させた人の輪は「長崎慈善会」という慈善団体となり、以後毎年自然災害、大火災、海難の被災民を支え続けた。そして九七(明治三〇)年にはキリスト者野村宗四郎の訓盲院の支援を決め、「長崎盲哑院」を開校するに至った。現在の長崎県立盲学校である。



音楽会後の長崎YMCAの消息は分らない。しかし「一粒の麦」となって大きな実りを生み出したことだけは確かである。そして十年後に、ふたたび甦えることになる。

キリスト教書店ハレルヤ

〒862-0971 熊本市大江4-20-23

TEL 096-372-3503 (FAX共用)

E-mail: K_haleruya@eath.ocn.ne.jp

今飛躍のとき。

自分史 My History
自分の歩いてきた人生を、
一冊の本にしてみませんか。

■ご予約に応じて作成致します。
お気軽にお問い合わせください。

●版促用印刷物に関する企画・制作 ●印刷 ●オンデマンドプリント ●マルチメディア企画

夢・飛躍
川口印刷株式会社

〒851-0134 長崎県長崎市田中町421-1
TEL. 095-838-2181 FAX. 095-839-5533
ホームページアドレス <http://www.kawaguchi-print.co.jp/>

文学に見るキリスト教

西洋文学を専門とされる先生方にご寄稿いただきました。

イギリス文学に見るキリスト教

相澤 興 一



イギリスにおけるキリスト教の伝播は多くの熱心な宣教師や献身的な信者の努力によるが、就中、五世紀から六世紀初頭にかけて、アイルランドの守護聖人、聖パトリックがブリテンに、同国の司祭・修道僧、聖コルンバヌスがスコットランドに広め、さらにローマ教皇グレゴリウス一世が、紀元五九八年、イングランドに聖アウグスティヌスに先導される四十人の修道僧を送り込んだことからアングロ・サクソン人の間に広まったと伝えられている。爾来、

キリスト教はイギリス人の思想・文化の全ての分野に影響を及ぼすことになった。イギリス文学も例外ではない。聖書やキリストの教えを直接扱ったいわゆるキリスト教文学、例えば、ジョン・ミルトンの『失楽園』（一六六七年）やジョン・バニヤンの『天路歷程』（一部一六七八、二部一六八四）のような作品もあるが、人間の思想や生き方を根底から問う文学作品には直接的・間接的にキリスト教の思想が盛り込まれているといっても過言ではない。

（大学教授）

ジョン・バニヤン著『天路歷程』

リチャード・ホドソン
（高橋美知子翻訳）

時代や文化を問わず、多くの作家たちが人生を旅に



例えてきた。そのような作品の中でも特に有名なのが、ジョン・バニヤンの『天路歷程』だろう。この作品は一六七八年と一六八四年に二部作として出版され、これまでに一〇〇以上の言語に翻訳され、読み継がれている。主人公はクリスチャンという名の青年で、彼はいわば、あらゆる人間の代表である。第一部は、彼が「破滅の町」から「天の都」まで旅する様子を描いている。クリスチャンは重い荷物を背負っていて、旅の途中で様々な危険や困難に直面し、多くの出会いを経験する。人びとの中には、助けの手を差し伸べてくれる者もいれば、彼を投獄しようとする者までいる。バニヤン自身、この作品を書き始めたときには牢獄の中に

いたことが想起される。

『天路歷程』は英語で書かれた作品の中で、もっとも後世に影響を与えた作品の一つだ。この作品は、シンブルかつ品格のある文体で書かれた、大人も子どもも楽しめる冒険物語だ。だが、それだけではない。同時に、キリスト教信者の人生における疑念や信仰、そして救済という究極の望みを描いた寓話でもあるのだ。

（短期大学専任講師）

ドイツ文学に見るキリスト教— ウェルテルの死

堺 雅 志



死は文学の最大の関心事の一つである。けれどもそれは必ずしも幸福な死を意味するものではない。むしろ人間が選ぶことのできな

い、あるいは選ばざるをえない死が克明に描かれる。

そしてそれはヨーロッパの文学において、キリスト教と無関係なものは皆無に等しい。ゲーテは『若きウェルテルの悩み』（一七七四年）において、婚約者のある女性シャルロッテに激しく恋をし、成就せぬ恋がゆえに（むしろそれは最大の原因の一つにすぎないが）拳銃で自殺したウェルテルの物語の最終行をこう結ぶ。「職人たちが棺を担いだ。僧侶は一人も随行しなかった。」つまり教義に反する自殺をした者のために、教会葬が営まれることはなかった。ウェルテルはもちろんそれを知っていて「信心深いキリスト教徒たちの遺骸をこの不幸な男のかたえに横たえさせたくはありません」と書き遺す。主人公はキリスト教の倫理を背負いながら、選ばざるをえなかった死を決断したのであった。

（大学助教授）

天国は待つてくれる、
でも地獄は待つては
くれない

高橋博幸



光と影の国スペイン。あらゆるものに光と影の両面がある。フラメンコも然り。明るく情熱的なイメージの影には民衆の苦悩と貧困の叫び、反抗と抗議の音が通奏低音となって響いている。キリスト教として例外ではない。寛容さと厳格さをあわせ持つ。一七世紀の劇作品『セビーリヤの色事師と石の招客』(ティルソ・デ・モリナ作)がよい例だ。主人公ドン・ファン・テノーリオは光源氏も顔色なしのプレイボーイ。女性を騙し、たぶらかすことを唯一の生き甲斐とする破廉恥漢である。「そんなふうになをペテンにかけて騙してばかりい

ると、必ずや天罰が下るぞ、たとえ今は神の慈悲と猶予があるように見えても天罰は遠からず下るもの」という父親の叱責も従者の諫言も、当の本人は聞く耳を持たない。それどころか、「あの世へ行ってからですか? それまで待つて貰えるんですね? そうか、なんとも気の長い話よ!」とうそぶく始末。そしていい気になって悪行を続ける。しかし、神の寛容にも限度があるのだ。とうとう最後には神の手によって罰せられ、主人公は地獄に落とされる。しかし、それはドン・ファンが神への信仰を失ったためではなく(彼は無神論者ではない)、あまりにも神の慈悲に頼りすぎ、神に与えられた自由意志を誤って用い続けたためである。つまり自分の自由意志でもってできるだけ早く過ちを正すことが肝要なのだ。天国は待つてくれる、でも地獄は待つてはくれない、のである。

(大学教授)

"More than a mark"
「校章に込められた
メッセージ」

ロレッタ・ロレンツ
(高橋美知子翻訳)



私が長崎外国語短期大学に来て、今年で二年になりました。この場を借りて、その日々を振り返る際に、私の心に浮かぶことを述べてみたいと思います。そのためには、いつもより広い視野で、この短期大学と大学を眺めてみる必要があるでしょう。本学の現状や将来像についてだけでなく、本学らしさとは何であるのか、もっと広い枠組の中で、この学院の位置づけを考えていきたいと思います。

十二月に発行された本学の広報誌、「ぶどうの樹」の一面に載った記事は、聖書に基づく本学のルーツについてでした。それは、聖書からとられた「Via, Veritas, Vita (道、真理、生命)」という本学のモッ

トーに表れているものです。この三つの単語は、非常に多くのことを象徴していて、本学での教育に当てはめて考えることも出来ます。しかし、記事に書かれてあったように、これはイエスの言葉で、正確には「私は」で始まっていました。つまりイエスは、「私は道であり、真理であり、生命である」と述べられたのです。見慣れたV.V.V.の校章を書類や、学校のパンフレット類で見かけるたびに、私はこのイエスの言葉を思い出します。それは、私がカトリックであり、他の全てのクリスチャンと同様に、この言葉をとても大切に思ってきたからなのかもしれません。

たいへん概略的になるかもしれませんが、この言葉について私なりの解説をしてみようと思います。まず、イエスが「私は道である」と言われた時、「道」とは文字通りの道と、もう一つ、人生に意味を与えるための方法の意味していたはずで、そして「私は真実である」と言われた時は、私たちが人生で出会った戸惑いは、イエスを通じて解き

明かされるのだという意味であつたはずで、「私は生命である」と言われた時には、彼こそが、私たちという存在を内からも外からも―身も心も―支えているのだという意味であつたはずで、そのことに、私たちが気づいていても、気づいていなくても。

この記事を目にされる全ての皆さんが、クリスチャンであるかどうかにかかわらず、このモットーの中に本学の存在意義を読み取ってくれるよう願っています。そして、そこから皆さんがより深く新しい言語―宗教の言葉―の世界へと招かれますように。私たちは皆、その一部なのです。そしていつか皆さんがこの学校のことを思い出し、このモットーを思い出す時、何か新しい発見をされるよう、心より願っています。魂の奥底の静かな部分に、私たちの希望と過ちの源が眠っています。そこを覗きかけを、このモットーが皆さんに与えてくれますように。

(短期大学教授)

映画紹介

『「良心」と「勇気」』

『ヨーク軍曹』(Sergeant York) (一九四一)

『真昼の決闘』(High Noon) (一九五二)

『友情ある説得』(Friendly Persuasion) (一九五六)

山川 欣也

唐突に脈絡もない任意の

三本の映画が並んでいるわけではない。作品自体がふとした拍子に忽然とそれを観たい衝動に駆らせる煽動装置と化している三本というわけでもない。ましてや、アメリカ映画を代表する映画監督の作品だからということでもない(実際はそうです)。三本の映画の共通点は、単純に主人公を同じ俳優が演じていることではなく、共通点とも言えないような共通点である。しかし、その俳優が演じた人物像がそうであるとすれば、俄然、話は面白くなる。

「良心的兵役拒否」

(Conscientious objection)

なる思想・行為がある。宗教的あるいは思想的信条から、戦闘的兵役に就くことを拒否するというものである。キリスト教の一派、いわゆるクエーカー派の思想信条の一つ(非暴力主義)としてよく知られ、この宗派の社会性故に単に宗派内の信条にとどまらず歴史的に広く認識されるようになり、さらに一般的にその考え方が認知されるようになったのは、ヴェトナム戦争時のモハメド・アリ(イスラム教徒)によってであろう

か。ドイツでは、既に憲法上に規定された権利となっているほどである。

三本の映画で主人公を演じたのは、ハリウッドの顔の一人であり(実は最初の二本でそれぞれアカデミー主演男優賞を受賞)、人生の選択に揺れる朴訥な人物を演じたゲアリー・クーパー。三本の映画の主人公も例外ではなく、『ヨーク軍曹』では第一次世界大戦の国民的英雄を、『真昼の決闘』では西部の小さな町の保安官を、『友情ある説得』(カンヌ映画祭でパルム・ドールを受賞)では南北戦争時のある一家の家長を演じたクーパーは、やはり葛藤していた。凡庸でもあり窮極ともいえる選択の間で。そして、その震央に「良心的兵役拒否」の思想があった。

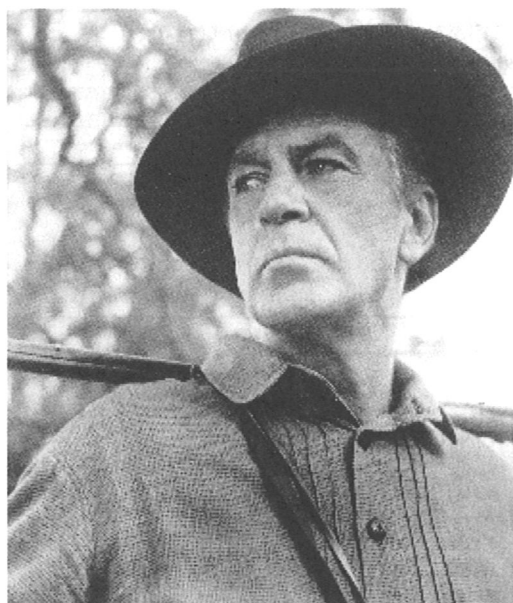
厳密に言えば、三本の映画全てでクーパーは良心的兵役拒否者を演じたわけではない。『ヨーク軍曹』の

良心的兵役拒否者クーパーはこれを翻意し、『真昼の決闘』のクーパーは新妻がクエーカー教徒であるにすぎず、クエーカー教徒である良心的兵役拒否者クーパーが苦悩するのは『友情ある説得』だけである。であるにしても、戦闘行為の可否の一点からすれば、いずれの作品でもクーパーは懊悩し、これは丁寧に描かれた。素朴で飄々とした人物像であるからこそ、その姿は何らかの共感を呼ぶ。それは、結果行動は措くとし

て、私たちは、何ものにも妨げられないその選択に、つまり自己の良心に誠実に従った、その選択の勇気に感動するのではないか。三本の映画は、私たちに「良心」を持って、そしてそれを体現する「勇気」を持って語りかけているのではないか。

『ヨーク軍曹』は真珠湾攻撃の年に、『真昼の決闘』はマッカーシズム全盛時に、『友情ある説得』は大量報復冷戦期に公開された。

(短期大学教授)



ゲアリー・クーパー (1901-1961)

2006年度 チャペルアワー等の記録

(春学期)

チャペルアワーは毎週水曜日午後12:40～1:00実施

回	月 日	奨 励 題	聖 書	奨 励 者
宗教オリテ	4月5日	求 め な さ い	マタイ7.7,8	小西 哲郎宗教主任(長崎学院)
1	4月12日	信仰とコミュニケーション能力	マルコ11.12-14	福井 博文牧師(長崎古町教会)
2	4月19日	生かされている私	ルカ12.22-28	松本 汎人理事長(長崎学院)
3	4月26日	本 物 は 誰 だ ?	マルコ15.33-40	原 和人牧師(長崎銀屋町教会)
4	5月10日	人 間 を と る	マルコ1.16-20	沖田 康孝牧師(長崎馬町教会)
5	5月17日	御 言 葉 に 触 れ る	マルコ1.1-4	信太 聖吾牧師(長崎滑石教会)
6	5月24日	神 の も の は 神 に	ルカ20.20-26	三浦 功牧師(ナザレン 長崎教会)
7	5月31日	神 に 選 ば れ た 私	ヨハネ15.16	阿部 哲也理事(長崎学院)
8	6月7日	祈 り の 言 葉	エフェソ1.15-23	信太 聖吾牧師(長崎滑石教会)
9	6月14日	し つ こ い 奴	ルカ11.5-10	原 和人牧師(長崎銀屋町教会)
10	6月21日	人生へのチャレンジ	マタイ25.14-18	吉川 八郎牧師(長崎教会)
11	6月28日	たとえて語られる御言葉	マタイ13.10-17	信太 聖吾牧師(長崎滑石教会)
12	7月5日	継 続 こ そ 力 な り	マタイ19.30	吉田 雄之進理事(長崎学院)
13	7月12日	神 は 愛 で ある	一ヨハネ4.7-12	川越 弘牧師(日本基督 長崎伝道所)
14	7月19日	神 さ ま の 声	サムエル上3.1-5	小西 哲郎宗教主任(長崎学院)

(秋学期)

回	月 日	奨 励 題	聖 書	奨 励 者
1	9月27日	待 っ て い ま す 。	マタイ11.29	原 和人牧師(長崎銀屋町教会)
2	10月4日	新 た に 生 ま れ る	ヨハネ3.1-8	三浦 功牧師(ナザレン 長崎教会)
3	10月11日	も っ と も 大 き な 賜 物	一コリント12.31-13.3	信太 聖吾牧師(長崎滑石教会)
4	10月18日	空の鳥を見なさい	マタイ6.26	福井 博文牧師(長崎古町教会)
5	10月25日	戦争体験について ―北朝鮮の核実験をうけて―	ヨハネ15.1-10	藤末 文夫理事(長崎学院)
6	11月1日	敵意という壁を取り壊す	エフェソ2.14-17	村井 仁牧師(長崎鮑の浦教会)
7	11月8日	主 は ぶ ど う の 木	ヨハネ15.1-10	三浦 功牧師(ナザレン 長崎教会)
8	11月15日	喜 び に つ い て	ローマ15.1-6	信太 聖吾牧師(長崎滑石教会)
9	11月22日	エ マ オ ヘ の 道	ルカ24.13-18, 25-32	土井 信義理事(長崎学院)
10	11月29日	テ ロ リ ス ト	マタイ5.43-48	原 和人牧師(長崎銀屋町教会)
11	12月13日	神 の 知 恵	一コリント1.18,19	信太 聖吾牧師(長崎滑石教会)
クリスマス	12月19日	Merry Christmas!	ルカ2.8-14	友納 靖史牧師(バプテスト 長崎教会)
12	1月10日	新 た な る 誕 生	ヤコブ1.18	三浦 功牧師(ナザレン 長崎教会)
13	1月17日	目を覚ましておく	マルコ13.32-37	信太 聖吾牧師(長崎滑石教会)
14	1月24日	神は共におられる	マタイ1.18-25	村井 仁牧師(長崎鮑の浦教会)

編 集 後 記

『チャペル通信』第十六号をお届けします。ご寄稿いただいた各位に感謝申し上げます。寄稿者の一人であるロレンツ先生は、本学での20年以上に及ぶ教員生活を終えられ、本年三月末に退職されます。これまで先生が本学に対してなされた多くの貢献に、心より感謝申し上げます。長崎学院は昨年創立60周年を迎えましたが、このように多くの方々のお力あって、一步一步歴史を刻んでいっているのだと思います。

私事ですが、長崎学院に奉職した2年間、チャペルアワーは、宗教を持たない私にとっても、週の真ん中の心休まるひと時でした。日々の時間は慌しく流れてゆきますが、これからも長崎学院では、このようなゆとりのある時間を持ち続けていって欲しいと心より願っています。(高橋美知子)